

子ども教育

通信

こんなチカラが身につく授業
保育内容指導法

環境



身のまわりのあらゆる環境は、
子どもの好奇心と探究心を引き出す教材。

西出和彦 教授

たとえば先生が指示を出せば、幼い子どもは言われるままに行動するだけですね。この科目では、子どもが自ら考えて行動する力を養うための「環境」の活かし方について学びます。大事なのは、子どもの周りにある様々な「環境」に、どう関わらせ、どう気付かせていくか。何かの事象に対して「なんで?」と思ってもらうことが、自主性の鍵となる「好奇心」「探究心」を引き出すポイントです。今回の授業では、仁愛大学の近隣にあるビオトープで自然体験を行いました。野生の生き物との関わりは、子どもにも保育者にも多様な気づきを与えます。子どもは「捕食-被食関係」や「死」との出会いを果たします。保育



者は、自然の中での遊ばせ方、「好奇心」「探究心」の引き出し方、安全の確保の仕方などの経験を得る時間になります。学生の皆さんには、この学びを通して、身の回りの環境を自由に活用しつつ、子どもに寄り添い、共感し、受け入れることができる保育者になってもらいたいです。

実際の体験や経験が、
子どもの気づきの
機会を増やす。



子ども教育学科2年
高井天豊
| 美方高校出身 |

実際に自分で体験することが、子どもに気づきをもたらすためにとても重要であると、改めて思いました。たとえば、どんな虫がいるのかわかれば、子どもに伝えて好奇心を引き出すチャンスが生まれます。道具を使った触れあい方も教えられる。どこまでの範囲が安全か把握できれば安心して見守ることもできます。そういった体験を近隣で気軽に出来る仁愛大学は、非常に恵まれた環境にあることも再認識しました。将来は、子どもが楽しみながら学ぶ場をつくれる保育士になりたいです。

体験!教育実習レポート!

子ども教育学科では、小学校教諭の免許状取得のために4年次、実習に行きます。
そこには、実際に、子どもを前にした時にしか体験できないたくさんの学びがあります。



子ども教育学科4年
島田里那
| 勝山高校出身 |



大切なのは、子どもたちが、自ら楽しめる授業をつくること。



実習期間 / 2021年5月24日～6月18日

実習先・担当クラス / 北郷小学校・6年生

実習の体験は、悩んだり迷ったりすることも多かったですが、教師を目指す私にとって本当にかけがえのないものになったと思っています。

期間は、4週間。1週目は、観察授業として1～6年全学年の授業を見学。2週目には、学習のアドバイスをするなど学習支援を主とした部分実習を行いました。そしていよいよ3週目から6年生の理科・算数・国語・道徳の科目について本格的に任されました。授業の前には、まず指導計画を作成します。作成するのは、授業1時間分の目標と計画を立てる「略案」と、単元全体の指導計画を立てる「細案」。担当の先生に添削してもらった後は、子どもたち

に分かりやすく伝えるための教材の準備をして本番に臨みます。

いざ、授業をしてみて大変だと感じたのは「子どもたちに自ら発言してもらう」ことでした。なかなか口を開いてもらえないので、結果的に私が自らしゃべり続けてしまい、ますます子どもたちが口を開かなくなるという悪循環へ…。そこで、3週目からはペア活動やグループ活動を行い、出来るだけ子どもたちに自ら考えてもらうように工夫しました。すると、子どもたちは楽しそうに積極的に取り組んでくれて、私自身も楽しい時間を過ごせました。

そして、子どもたちの自主性をさらに強く引き出せたと感じたのが、最終週の授業です。

内容は6年間の算数で最難関とされる「分数÷分数」。計算式を教えずに自ら気付いてもらうことを目的に設定し、グループ活動でそれぞれに考えてもらいました。その結果、子どもたちは、面積を使ったり関係図を使ったりして、想像を超えた色々な答えの導き方を提示してくれたのです。

私にとって理想の先生像は、子どもたちが自ら楽しめる授業を用意できる先生です。つまりは、子どもたちが活躍する授業。それを実現するために、授業とそれ以外の時間も使い、子どもたちが心からわくわくしながら、いつの間にか実力を付けていけるような授業を行うための努力をしていきたいと思っています。

感じてほしいこと、学んでほしいこと

教師という仕事の、本当のやりがいに触れる時間となるでしょう。

今年も、コロナ禍でしたが無事に終了しました、小学校実習。仁愛大学子ども教育学科は、福井市・鯖江市・越前市の3市の教育委員会と提携し、そのエリア内の小学校で実施しています。2021年は、例年の約2倍の36名が参加し、提携校では収まらず、学生の母校においても行いました。

小学校実習には2つの大きな目的があります。ひとつは、「教師の仕事の全体を学ぶこと」です。当然ですが、教師は授業以外にも多様な仕事に取り組んでいます。授業の設計や準備物の用意の他、学級活動の指導、行事では、遠足の企画・準備など、多岐にわたる様々な業務を通して、子どもたちの成長を支えている

事実を知り、学生たちは教師という職業の更なる価値に触れます。

もうひとつの大きな目的は、「自分の適性の確認」です。実は、実習を終えて「自分は教師に向いていない」と判断する学生も、ごくまれにいます。それはいわば実際の教師の仕事が思い描いていたものと異なっていたということです。ポイントとなるのは、小学校で働く全ての時間において子どもたちの成長を考えたコミュニケーションや各作業が行えるか、です。子どもたちのどんな力を養うかを考え、どんなプロセスが必要かを配慮し、子どもたちを「客観的に見つめる視点」と「同じ目線に立った視点」を持って教師の日々を過ご



伊禮三之 教授



三田村雅人 准教授

していけるかが重要になります。今年の実習を終えた多くの学生たちが感想として私たちに伝えてくれた言葉は「楽しかった!!先生、やっぱり教師になりたいです!」というものでした。本当に嬉しく思います。

実習をお願いした多くの小学校の校長先生から「ぜひうちの学校に来てほしい」と言われています。手前味噌になりますが、当学科の先生の丁寧な指導と、絶対に教師になりたいと一生懸命に勉強する学生たちの思いがマッチしている結果だと考えています。良い教師がこれからもたくさん社会へ羽ばたくために、私たちがますます頑張らなければと、感じています。